

中共における陶淵明評価の問題

小 竹 武 夫

中共の“光明日報”紙に毎週文学や哲学に関する報道・論文などの特輯附録があり、文学に関するものは文学遺産と題し、中国古典の問題を取扱っている。その第240期(1958年12月21日)第243期、第244期(1959年1月11日・18日)で問題を陶淵明に集中しているのが興味をひく。その要目を列挙すると次のようである。

報道として

1. 「陶淵明評価問題に関する討論」 北京師大中文系二年級学生によるもの(第240期)

論文として

2. 「陶淵明は基本上、反現実主義の詩人である」 北京師大中文系二年級二班第一組集体討論(第240期)
 3. 「陶淵明は基本上、現実主義詩人である」 甘肅師範大学 盧世藩(第244期)
 4. 「陶淵明評価の諸問題」 北京師大中文系教師 郭預衡(第240期)
 5. 「退隱には積極意義の反抗があるか？」 吉林大学中文系 張連喜(第244期)
 6. 「陶淵明の帰隱の客観意義と影響」 河北寧晋師範学校 傅晋理(同上)
 7. 「陶淵明の帰隱と労働」 北京清河制呢廠 一粟(同上)
 8. 「陶淵明の辞官帰隱に対する浅見」 北京師範大学中文系 趙德政(同上)
 9. 「陶詩の芸術風格と現実性を略談す」 宣化地質学校 段鉄基(同上)
 10. 「陶淵明に対する評価問題上より見た劉大杰先生の資産階級観点」 復旦大学中二創造性小組(第243期)
10. に関する報道として
11. 「資産階級學術思想をば古典文学研究領域中より清掃除去せよ」 復旦大学中文系文学教研組 余一(第243期)

上記で見られるように、それらは陶淵明の政治態度と労働参加の問題に集中されており、思想傾向とその発展変化、および芸術性などについては余り論じられていない。編集後記によると50幾篇の寄稿があったそうであり、今後も各方面にわたる所論の集まることが期待さ

れているが、今は前記諸篇のうち、1. 2. 10. 11. および4. についてその大要を紹介し紛々たる中にも一貫している中共らしい文学見解と、その背後に在るものを些か考えて見たいと思う。

1. 「陶淵明評価問題に関する討論」について

教学改革以来、我らは新しい教学大綱と新しい講義草稿とを編訂し、教学思想と教学内容に大きな変化を生ぜしめた。「厚古薄今、古為今用」の精神は人々が体得すればするほど深刻である。しかし学術問題はいささか複雑で、短期間に結論を見出すことが困難であり、陶淵明に対する評価の問題がすなわちこれに属する。新大綱の中で陶淵明に対し、「基本上は反現実主義詩人である」とする評価は、本校の教授学生間に各種不同の反応を引き起こした。こうした状況に対して、党の「百花齊放」「百家争鳴」の方針を貫徹するために、すなわち広汎な群衆の知慧を集中することによって陶淵明に対する全面的な評価を見出すために、我ら中文系党総支は科学討論会を催し、討論を通して学術的雰囲気を活潑ならしめ、科学的研究の発展を推進せしめるよう希望し、如何にして古代文学遺産を正確に受取るかを了解せしめることに決定した。党の指導の下に、中文系二年級全体と古典文学教師・研究生ら 250 余名は11月17日(1958年)集会し討論した。正式の開会に先だって、我らは陶淵明の作品全部とその参考資料を閲読し、各班を小組に分け、幾回かの討論を進めておいた。そのときあらゆる陶淵明評価には凡そ六種の意見があった。

- (1) 偉大な現実主義詩人である
- (2) 基本上は現実主義詩人である
- (3) 基本上は反現実主義詩人である
- (4) 徹頭徹尾の反動文人である
- (5) 前期は反現実主義、後期は現実主義の詩人である
- (6) 現実主義とも言えず又反現実主義とも言えず、根本はこうした結論を下す必要がない

い

小組で幾度も論争したのち、意見の修正が見られ、正式開会の際にはほぼ(2)と(3)の二種の意見のみが残された。大会での発言希望者が頗る多く、時間の制約により、二人の先生と七人の同学が発言した。その発言は基本上、全参加者の論点を包括し得るものであって、その主要論点は次の通りである。

一. 陶淵明の世界観と政治態度について

陶淵明を基本上は現実主義詩人であると認める論点——

彼は少年時代に壮志を有し、かつて「游好するところ六経に在り」、また「命子」の詩によって「建功立業」「佐天子以治天下」という願いを持っていたことがわかる。これらは儒家思想の積極入世の表現であり、そこには些か進歩性がある。但し統治階級内部の暗黒と政治の腐敗とによって、やや気骨のある人々には迫害が加えられた。こうした状況下で、彼は国を濟い世を治めようという抱負を実現できなかったのみならず、身を滅ぼされるおそれさえあった。このような現実に不満であった彼は、五斗米のために郷里の小児に向って腰を折ることを肯んぜず、統治者と流れを同じうし汚れを合わすことを願わず、帰隠したのである。こうした帰隠は消極的ではあるが、当時においては進歩性のあるものであり、一種の反抗であった。さらに彼は退隠の後も、国事について考えたことは「贈羊長史」「述酒」などの詩から見られる。彼の思想中、主流をなすものは儒家思想であり、後に至って「独りその身を善く」したのであった。そのほか彼は幾つかの点で儒家思想の範囲を突破している。その世界観の中で、「有生必有死，早終非命促」（生有れば必ず死あり，早終も命めいの促ちぢまれるに非ず）とするのは、当時流行の仏家思想とは完全に異なり、その中に幾分の素朴な唯物論的成分がある。

陶淵明を基本上は反現実主義詩人であると認める論点——

彼の初期の壮志は、官海角逐の中において自己の仕官の道に志を得ることを希求するのみであって、李白の「濟蒼生」とも、杜甫の「致君堯舜上」とも同じくない。当時の門閥制度の厳しさに、彼は這い上ることができなかったのである。彼の不合作は、合作したくてできなかったものであり、何ら現実の不满に対する反抗ではなかった。不満があったとすれば、それは自分の志を得なかったからであって、広大な人民の角度から発したものを見出すことができない。そして失望の余り、「安貧楽道」「君子固窮」を以て自ら嘲りを解いたのである。後になるほど希望を失い、自然に順応する道家思想が濃厚になり、いよいよ以て頹廢した。

「何以称我情，濁酒且自陶」（何を以て我が情に称えん，濁酒しほ且らく自らたの陶しむ）という人生観はいよいよ以て灰色になった。彼は果して功名利禄を厭悪したであろうか。彼は「命子」の詩中で、自分の祖宗を誇り、その武功聖徳をたたえ、自分自身は這い上れなかったので、子らに希望を寄せた。これは正に彼の帰隠の虚偽を証明するものではあるまいか。

二. 陶淵明の労働と労働人民に対する態度について

陶淵明を基本上は現実主義詩人であると認める論点——

彼自身一定の労働に従事したからである。初期においては些か趣味的で、「農人告余以春及，將有事于西疇，或命巾車，或棹孤舟，既窈窕以尋壑，亦崎嶇而經丘」（農人余に告ぐるに春の及ぶを以てす，將に西疇に事あらんとす，或は巾車に命じ或は孤舟に棹さす，既に窈窕として以て壑を尋ね，亦崎嶇として丘を經）という具合であり，正確には一種の地主であった。しかし後期にあっては生活のために労働していたことが「晨興理荒穢，帶月荷鋤歸……衣沾不足惜，但使願無違」（晨に興きて荒穢を理め，月を帯び鋤を荷いて歸る……衣の沾るは惜しむに足らず，但だ願いをして違ふこと無からしめよ）などの詩句からうかがえる。さらに「勸農」の詩の中の「民生在勤，勤則不匱，宴安自逸，歲暮奚冀」（民生は勤むるに在り，勤むるときは匱しからず，宴安自逸ならば，歲暮奚ぞ冀わん）および「舜既躬耕，禹亦稼穡」などより，彼が儒家思想の局限性を突破し，孔子孟子の「勞心者治人，勞力者治于人」の労働蔑視と同じでないことが看取される。門閥制度の厳しい六朝時代として，この種の思想は彼の進歩性を示すものである。

彼の後期における貧困は，彼を人民に接近させ，農民とのつながりを持たせた。「相見無雜言，但道桑麻長」（相見て雜言するなく，但だ桑麻長びたるを道う）は農民との親密な感情を示すもの。彼は子に奴隸を与え，「此亦人子也，可善遇之」（これも亦人の子なり，善く之を遇すべし）と言いつくめているが，このことから彼に人道主義思想のあるのがわかる。その中に民主思想の素因が反映されており，当時においては進歩的なものである。またこうした基礎があったからこそ，「桃花源詩」の中に「春蚕收長絲，秋熟靡王稅」（春の蠶に長き絲を収め，秋の熟りに王稅靡し）という美しくも好ましい幻想を歌えたのであろう。それは空妄だとは言え，農民の痛苦に同情する基礎の上に建築されたものである。

陶淵明を基本上，反現実主義詩人であると認める論点——

彼は根本的には如何なる真正の労働にも従事しなかったし，その所謂労働は完全に地主士大夫の一種の暇つぶしに過ぎなかったからである。労働人民には「采菊東籬下，悠然見南山」という閑情がない。彼の労働重視は只農民の労働を叫ぶのみであって，農民の「儋石不儲，飢寒交至」（儋石儲えず，飢寒こもごも至る）を彼らの安逸の結果だとしており，これは明かに一種の反動思想である。彼の交友もすべて地主文人であり，農民は何としても彼と一緒に「奇文共欣賞，疑義相与析」（奇文あれば共に欣賞し，疑義あれば相与に析す）ことが不可能であることを認めなくてはならない。「桃花源詩」の中の「俎豆猶古法，衣裳無新制」

(^{そとう}俎豆なお古法のごとく、衣裳に新制なし)は完全に復古思想であり、歴史を逆行させようとするものである。その小国寡民の思想はそれ自体落後的であり、農民の素朴な、現実基礎の上に建立される社会理想と共通するところがないのみか、却って人を現実逃避に導くものである。

三. 陶詩の現実に対する反映について

陶淵明を基本上、現実主義詩人であると認める論点——

陶詩がある程度、社会現実を反映していることにある。東晋と宋齊時代の社会動乱・民族矛盾・階級矛盾は彼の作品の中にも反映されている。「福不虛至、禍亦易来」(福は虚しく至らず、禍も亦来り易し)「天道幽且遠、鬼神茫昧然」(天道は幽にして且つ遠く、鬼神は茫昧然たり)これらの詩句は当時の暗黒政治に対する一種の反映であり、それに対する詩人の憎悪を表現している。桃花源の幻想は更に反面より現実に対する不満を表現している。農村生活に対する描写に至っては、現実を粉飾するものと一筆を以て断ずることはできない。初期には農村生活は恬静和平に描写されたが、これは地主の眼光をもって見たからでもあろうが、他面また汚濁政治の渦中から農村に帰ったばかりの彼の新鮮な感覚に映じた呼吸の自由さを反映したのもあろう。その後、生活の困窮につれ、漸次農村生活を認識し、些か農村の貧困と災荒を反映した作品をものした。「有会而作」の詩に「舊穀既没^な、新穀未登、頗為老農、而値年災、日月尚悠、為患未已」(舊穀すでに没^なく、新穀いまだ登^{みの}らず、頗きて老農と為り、しかも年災に値^あう、日月なお悠なり、患をなすこと未だ已^やまず)とある。陶詩は現実を反映すること不十分ではあるが、同時に曲折隱晦である。これらは何れも時代背景に联系させて見るべきであり、当時においてこのような作品をものし得ることは、他の作家に比し甚だ立派である。

陶淵明を基本上、反現実主義作家であると認める論点——

詩人はその作品の上に社会本質を反映しなくてはならない。六朝時代の民族矛盾・階級矛盾は非常に複雑尖鋭であるのに、陶詩にはその反応が見当らない。我らは陶詩を読んで六朝の社会現実を知ることができないのみならず、彼が農村を恬静舒適に描写し、地主の眼光をもって農村生活に美しい外衣をまとわせているのを見る。これは矛盾を掩いかくし、人を闘争回避に導くものである。その他、彼は統治階級内部矛盾を反映する作品を残しておらず、彼の作品の大半は個人情緒の抒発であり、自我中心の描写である。さらに、当時いささかなりとも気骨のあった文人は殺害され或は排撃されているのに、陶淵明は安々穩々であった。

これは陶詩が少しも統治者の病弊に触れておらず、矛盾をあばくこと深刻でなかったことを証明して余りあるものでなかろうか。

四．陶詩の芸術風格および後世への影響について

陶淵明を基本上は現実主義詩人であると認める論点——

六朝の詩壇においては、形式主義が支配的で、華麗淫靡な宮体詩や曲折隱晦な玄言詩が蔚然たる風気をなしていた。しかるに陶淵明は清新素朴な風格と自然流暢な言語をもち、内峙上にも風格上にも六朝靡麗の音とは截然として異なるものをもっていた。その創作態度は、形式主義に反対する鬭争においても些か好い作用を起した。彼の創作は後世の作家にも影響した。孟浩然・李白・柳宗元・黄遵憲の如きがそれである。その影響には積極的な面があり、正直な士大夫が統治者と合作しないよう鼓舞した。しかし消極的な面もあって、ある人々をして、挫折・打撃を受けた後において進取を求めず、陶詩に慰安を求め自ら嘲りを解かした。しかし現在に至っては、彼の思想に毫も積極的意義は認められない。

芸術問題に関して、陶淵明を基本上、反現実詩人と認める同志は何ら意見を發表しなかった。しかし陶淵明の後世に対する影響について彼らは次のように認める——その影響は悪劣を極めたものであり、現実を逃避する人々のために一条の道をひらいた。今日我らが陶詩を研究する旨意の主なもの、それを批判することである、と。

この討論会では、最後の結論が得られなかったとは言え、参加者のすべては収穫の多大を感じた。同時にこの討論会は同学諸君の独立の思考能力を培養し、また従来のような教師が教室で講義し、学生がそれを暗記する教学方式にたよることを改めさせはじめた。それは又、教師も学生も自己の見解を發表し、學術の前には一律平等である精神を顯示した。また教学に対する広汎な群衆性を配合する討論は、教学の質量的高揚を促進しうるものであることが事実によって証明された。それは同時に百家争鳴の學術方針を具体的に體現し、科学研究に対する興趣を啓発したのである。

現在、中文二年同学と古典文学教師とで陶淵明研究班を組織し、継続して広汎に資料を搜集し、古今の諸家の見解および今次討論で發表された正確な意見を吸収し、陶淵明を全面的に評価する論文をものすべく準備中である。

2. 「陶淵明は基本的には反現実主義詩人である」について

一．陶淵明の生活と思想

陶淵明は没落士大夫の家庭の出で、あらゆる封建文人と同様、高位厚禄にありつこうとしたが、当時の門閥制度の下では、彼の願望も実現の見込みがなかった。小役人になったとてそれが実現されたことにならず、また他人に腰を曲げねばならず、そこで退隱した次第であり、退隱の後は「独善其身」という消極的な道を歩んだのである。現実に対する彼の態度は消極的であった。これは一面、当時の時代が政治上空前の暗黒時代であり、現実に対して反抗すれば、迫害を被むる可能性があったからであるが、反面、彼自身の軟弱性によることでもあった。彼の階級出身と生活経歴とは、「独善其身」をもって行動の指針とするよう彼を決定づけたのである。しかし退隱後の彼が、そのまま隱居してしまうことに満足できず、さりとて希望も持てず、その内心の矛盾を作品に示していること「形影神三首」の詩などがその反映であり、そのため解決の方法のない愁を酒で消すよりほかなかった。これこそ陶詩が殆んど毎篇酒に及んでいる所以であり、また道家思想との共鳴をもたらす所以でもあった。

退隱後、彼が些かの労働に従事したことは、一般の封建文人と比較して、貴ぶべきことであるが、しかしその労働は基本上、生活の手段ではなくて、一種の精神のよりどころなのであった。まさに魯迅の言ったように、彼が「悠然見南山」というのも、物質的基礎があったからで、でなければ、悠然としていられる筈がなく、早く東籬の傍に餓死することを恐れなくてはならなかったのである。彼の晩年は確かにひどく貧乏であったが、貧乏は彼を消極性から解放せず、貧乏に直面しながら貧に安んじ道を楽しみ、時に及んで行楽するなど、労働人民の貧困とは本質的な差異がある。

二. 陶詩の歴史真實性

陶淵明が身を処したのは、一個の、階級矛盾・民族矛盾・統治階級内部の矛盾がすべて空前に尖鋭化した時代においてであった。広大な北方中国人民は異民族の統治下に処して水深火熱の生活をしていたし、南方中国の統治者の荒淫は「糖水洗鍋、臘燭煮飯」の程度に至り、人民は戦乱と剝奪と压榨の下に在って流離死亡し、ついには大規模の農民の起義（義によって兵を起すこと）を爆発させることになった。

しかるに陶詩には、こうした歴史の面貌が少しも反映されず、その主要内容は次の諸点に過ぎなかった。

第一は、彼の退隱後の個人的苦悶を反映したこと。「飲酒」の詩の大部と「形影神三首」などがこの部類に属する。これらの詩における個人的な「顧影独盡」（おのが影を顧みながら独り飲みほす）は結局何ほどの意義をもっているだろうか。

第二は、数の上で最も多く、彼が悠然として自ら楽しむ隠士の生活を反映したこと。「和郭主簿二首」「移居」「帰園田居」,「飲酒」の詩の一部分など、いずれも没落地主階級の生活を反映している。所謂「方宅十餘畝, 草屋八九間」「結廬在人境, 而無車馬喧。……采菊東籬下, 悠然見南山」(廬を結びて人境に在り, しかも車馬の^{かまびす}喧しきなし……菊を采る東籬の下, 悠然として南山を見る) および「相思則披衣, 言笑無厭時」(相思うて則ち衣を^{ひら}披く, 言笑厭く時無し)などの詩句は、現実を反映しないばかりでなく、却って現実を粉飾し、当時の残破した農村に一着の和平歎樂の外衣を着せて、階級矛盾を掩いかくしている。

第三は、彼の、貧に安んじて道を楽しみ、時に及んで行樂するという思想を反映したこと。政治に対する失意からして、彼の思想はいよいよますます消極的となり、「人生似幻化, 終當歸空無」(人生は幻化に似て, 終に^{つい}當に空無に歸すべし)「人生無根蒂, 飄如陌上塵」(人生には根蒂無く, 飄として陌上の塵の如し)さらに「有生必有死, 早終非命促」(生あれば必ず死あり, ^{いろうしゅう めい ちぢ}早終も命の促まれるに非ず)と言ったような詩句を高唱し、これによって「得歎當作樂, 斗酒聚比鄰」(權びを得て當に楽しみをなすべし, 斗酒比鄰を聚む)「千秋萬歳後, 誰知榮与辱, 但恨在世時, 飲酒不得足」(千秋萬歳の後, 誰か榮と辱とを知らん, 但だ恨む在世の時, 飲酒足るを得ざりしことを)という風であった。我らはこれらの詩がただ現状に安んじ、時に及んで行樂するような消極作用を人々に起こさせることを知っている。

「勸農」の詩は反動的な説教詩であって、それは彼が彭澤の令に就任する以前の作であり、地主階級的立場に立って農民によく労働すべきことを教訓したものである。彼は、「民生在勤, 勤則不匱」(民生は勤むるに在り, 勤むれば^{とほ}匱しからず)と言って、農民が貧乏する原因を完全に勤勉でないことに歸している。これはまことにたわけたことである。

以上あげた主要内容のほか陶詩の中になお「山中饒霜露, 風氣亦先寒, 田家豈不苦, 弗獲辞此難」(山中には霜露^{しげ}饒く, 風氣も亦先に寒し, 田家豈に苦しからざらんや, 此の難を辞するを得ず)「晨興理荒穢, 帶月荷鋤歸」(晨に興きて荒穢を^{あした お}理め, 月を帯び鋤を荷うて歸る)などの詩句があって、幾分現実を反映していることも肯定しなくてはならない。しかしこの類の詩は、数から言えば極めて少数であるばかりでなく、その多くは彼自身の生活を反映しているに過ぎず、時代の階級闘争の状況を反映し得るには程遠いのである。

そのほか逃晦的な方式を用いて、幾分政治的態度を流露した詩も少しあるが、それも多くは^{やるせなさ}牢騷と、壮志を実現できない感懐とを洩らしたものであり、最後にはやはり「天運苟如此, 且進杯中物」(天運いやしくもかくの如くんば, 且つは杯中の物を進めん) という消極

に陥っている。政治上の問題に対しては、せいぜい些の逃晦的不平を発しているに過ぎず、統治階級の内部矛盾を暴露し得るものはない。従って我らは「述酒」「讀山海経」「咏荆軻」などの詩を読んでも、その中から劉裕が晋を篡奪した事件を知る以外に、何物をも知ることができないのである。

陶詩の中には少数ながら採るべき詩があるが、それは時代の面貌を(たとえ部分的にも)反映し得なかったこと、そして大多数の作品は無意味であり、甚だしきは現実を粉飾しているものさえあることを我らは認めざるを得ない。

三. 陶詩の後世思想に対する影響

陶淵明は「古今隱逸詩人の宗」と称せられ、後世文人の消極退隱と鬪争回避とに一条の先路を開いている。しかしその現実逃避主義も彼ら自身の原因によるものであり、すべて罪を陶詩の影響に帰することのできないのは当然であるが、さりとて陶の影響もまた見のがせない。蘇軾の如き、失意の後、陶詩を欠くべからざる精神の糧としており、「体中佳ならざる毎に輒^{すなわ}ち取って陶詩を読むこと一篇に過ぎず。ただ恐る読み盡して後、自ら遣る無きことのみを」と言っている。その他、王維・孟浩然らの如きも同様である。陶詩は、偉大な詩人白居易に対しても悪劣な影響を与えている。白居易は失意の後、「渭上に退居し、門を杜^とじて出でず、……雨中に独り飲み、往往酣酔して、終日醒め」なかった。彼は「效陶潛体詩十六首」を作り、詩中、陶詩を称えて、「篇篇勸我飲、此外無所言。我從老大來、窃慕其為人。其他不可及、且效酔昏昏」と言っている。このように陶詩は、当時たると後世たるとを問わず、すべて人を消極の道に向かわせる促退作用を起こした。

陶詩の現代に対する影響は更に悪い。若干の資産階級的文人は陶詩を天に向けて捧げている。一部の青年たちも彼の悪影響を受け、反右派鬪争中に在って畏縮して前進せず、二十世紀の陶淵明たろうとしている。従って陶詩の後世思想に対する影響より見れば、陶淵明も根本は、或る人々がかつぎ上げているように、何か光輝ある現実主義詩人であるとする如きものでは決してないのである。

当然、陶詩の好い影響も完全にはないわけではないが、その悪影響に較べれば、甚だ微弱なものである。のみならずこの比較的好い影響の中でも、その多くは芸術的手法と言語方面とに偏しているのである。

四. 完全に否定することもできないこと

我らは陶詩の全体的な傾向よりして、それが基本上、反現実主義的であることを認めた。

しかし、このことは決して陶淵明には一点の取りえもないということではない。彼が統治階級の排斥を受け、現実に不満で官場から退いたことは、時代に在って一定の進歩的意味を持つものであった。幾分の補助的な労働に参加したことによって、その晩年の生活は比較的貧しく、そのため農民生活を或る程度反映した詩を作ることができたに過ぎない。なお又、彼が詩歌発展史の上にも或る程度の貢献があった。その芸術風格は比較的朴实であり、言語は通俗であり、思想感情の表現は平易であり、当時の形式主義文学に対する反対闘争において或る程度の作用を起し、また五言詩の発展に対しても或る程度の貢献があった。しかし我々が何としても指摘しなければならぬのは、陶詩の思想内容の消極性からして、彼の芸術性が非常に大きな制約を受けているということ、同時に陶詩の中に「命子」のような一類の形式主義作品もあるということである。

我々は陶淵明が基本上、反現実主義の詩人であるからと言って、彼の採るべき所をも一筆で抹殺することはできないこと、また彼の採るべき所も、彼の反現実主義的基本傾向を掩いかくすには足らぬものであることを肯定せざるを得ない。

10. 「陶淵明に対する評価問題上より見た劉大杰^{けつ}先生の資産階級観点」について

古典文学の研究において、客観的に評価せず、主観的な興味と偏見から出発し、主観唯心主義の泥沼に陥っているものがある。我々はその例を劉大杰先生著「中国文学発展史」に見る。劉氏は陶淵明の特徴として次の三点を挙げている。(一)その人生思想の全部とその作品との融合に成功していること。(二)その人格と作品を、当時の歴史条件下における最高典型たらしめていること。(三)その人生は最も真実なものであり、その思想中には儒佛道三家の精華があり、しかもその落後的部分を除いていること。要するにその人品と詩品において完全無欠とし、ただ最後に一二句陶淵明の限界性を付け加えているに過ぎない。人品の高貴、進歩的意義、革命的意義(玄言詩と駢詞麗句的形式主義に対する)、この三点は一応肯定すべきであろうが、その限界性の大を指摘せざるを得ない。劉氏の方法は、陶淵明をその当時の社会に聯繫させ、その作品と思想感情に歴史唯物主義的観点を用いて分析を加えようとするものでなく、資産階級唯心主義的観点を用いて問題を看るものである。

封建社会における作家を評価するには、作家の、人民に対する態度の如何を見、歴史上における進歩的意義の有無を先ず見定めなくてはならない。この点陶淵明はどうであろうか。陶は、北方鮮卑などから侵略され江南に偏在した東晋に居たが、そこには民族矛盾・階級矛

盾・統治階級内部矛盾が甚だしかった。人民は統一を渴望し、東晋の将領たちは幾度か北伐した。しかるに陶詩にはその痕跡が見られない。劉裕が長安を陥れ、軍を関中に駐めた事件は、詩人の平静な心に微かな波紋を起し、「贈羊長史」の詩で、「九域甫已一，逝将理舟輿。」（九域甫^{はじ}めて已に一，逝いて将に舟輿を理せんとす）と言い、さらに「路若經商山，為我少躊躇。多謝綺与角，精爽今何如」（路若^もし商山を^も経ば，我が為に少躊躇せよ。多謝^きす綺^{ろく}と角と，精爽いま如何）とある。これは高士に対する彼の傾向を十分に説明しており，国家・民族・人民に対する関心を遠く超越しているもの，これを屈原や杜甫に較べると大差あり，杜甫の「聞官軍収河南河北」の涕泪満裳と相去ること何と遠いことか。

晋末は階級矛盾も日に尖鋭化し，東晋の建立後，北方の士族は擁立の功を恃んで大量に土地を占領し，南方の地主も兼併に懸命で，農民は土地を失い，連年累月の徭役に応じ，子を売り女をひさぎ，流離所を失し，労働人民は残酷な剝削にやりきれず，ついに孫恩・盧循を首領とする農民の起義として爆発した。起義軍は二回陶の住む家郷を通過したが，陶詩には何ら反映されていない。彼は農民の痛苦について大声疾呼することなく，ただ「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」「詠貧士」「有會而作」「乞食」などの詩で隱約に農村の凄凉凋弊を表現している。一体陶はこの現実に如何に対処したであろうか。我らは陶詩の中に，当時の農村の残酷剝削の客観的事実を見出せない。時に被圧迫者の憤懣の流露してるものもあるが，統治者との闘争を喚起させるものがない。その作品は当時の階級矛盾に淡白で，農村の真実を掩飾し，いささかも積極的鼓舞作用がなく，有るのは只消極作用のみである。

もとより魏晋時代の文人の殆んどすべては，その思想傾向が現実逃避的で，罪を陶にのみ帰することはできない。陶としては当時の時代の限界を突破できなかったのであり，それは彼が没落的官僚地主家庭の出身で，父と祖父は太守などの官職についたことがあり，思想上，階級烙印が押されていたからである。「少而窮苦，每以家弊，東西游走」（少にして窮苦し，毎に家^{つね}の弊れたるを以て，東西に游走す）とは言え，帰隱したときには「方宅十餘畝，草屋八九間」と童僕を持っており，その後，貧苦に陥ったが，それでも農民に較べればましであった。

彼は道家の樂天安命・消極遁世の思想を受けて，その人生観上の限界性を造成した。このことが，凄凉破産の農村に住みながら，作品に農民の痛苦を反映し得ず搾取階級の罪惡を暴露し得なかった所以である。もし現実を正視し得たなら，現実逃避の態度をとらず，その階級限界と思想限界を突破して，一步を前進し得たであろう。

我らは一箇の作家を評価するのに、その歴史条件を離れ得ないが、しかし歴史条件を過度に強調して、作家の主観上の欠陥を解脱させることもできない。人の主観能動性は、客観が許した条件下に在っても、大きな作用を起し得るものである。門閥制度の不合理に対する左思の強烈な諷刺や反抗精神もなく劉琨の愛国的激情もなかった陶淵明は、その時代の歴史条件下の最高原型では決してない。

劉氏は陶を「魏晉思想の浄化者」「儒佛道三家の精華で、その落後的部分を去る」としているが、陶の思想を検討して見るに、少年時代の儒家の積極入世思想の薰陶、帰耕以後の独り其の身を善くする生活、儒家の貧に安んじ道を楽しむという思想、それが陶の精神の支えであった。儒家思想中の落後的成分は彼の身上には見当らない。彼が少年時代に受けた道家思想によって、退隱後の田園生活は詩人に自由の樂趣を与え、息交絶游の生活を与えた。世と争わぬ道家思想が彼の後半世の人生観を形成し、その現実逃避の落後思想が彼に限界を与えた。しかし仏教思想は陶に何らの影響を与えておらず、劉氏の説は根拠のないものである。

彼の人生は最も真実なものであったという問題について、我らは真実とは階級内容を持つものであって、抽象的なものでない信ずる。彼の人生は真実に個人的感情を抒発しているのであって、身を矛盾の中に置きながらそれを反映しなかった。彼の真実を強調し、自由と理想の追求を強調するのも、資産階級人性論的観点に過ぎず、劉氏の見方が根本において当時の具体条件を離れ、歴史観点と階級観点の標準を離れて、「最高典型」とか「思想の浄化」とか論断するのも、資産階級唯心主義的観点に過ぎない。

陶淵明は的確仔細な分析に値する詩人で、進歩的な一面をも有することを我らは肯定する。しかし彼の消極思想の批判は今日において大きい現実的意義を有する。従来の人々は陶を高く評価しすぎていたし、解放後の専門学者も陶に対して盲目的にその詩中の消極主義を歌頌し欣賞し、その結果、社会上、とりわけ青年学生に及ぼす害毒が甚だしい。最近の事実について見るに、或る学生たちは陶詩の影響により「采菊東籬下、悠然見南山」の隱士生活を追求し、現実逃避の消極頹廢思想を想うものが現われている。これによって、古代作家中の消極部分を批判することは、断絶と旧伝統・旧影響との関連上、重大な意義を具有するものであることが看取できるのである。

11. 「資産階級學術思想をば古典文學研究領域中より清掃除去せよ」について

資産階級學術思想の影響を肅正し、深刻に自我革命を進行するため、我ら復旦大学中文系

文学教研組は先般二回にわたって劉大杰先生の著「中国文学發展史」を批判し討論する座談会をもった。参会者は中文系教授学生 300 余名に達し、劉大杰先生も出席された。

発言者は一様に該書中に在る濃厚な資産階級學術思想を指摘したが、その主なるものは次の三方面である。(一)資産階級の通俗的進化論をもって無産階級の弁証唯物主義歴史觀に代えたこと。(二)資産階級の人性論をもって無産階級の階級分析に代えたこと。(三)形式主義の批評方法をとったこと——芸術性を強調して思想性を輕視したこと。

(一)については、階級闘争の、文学發展中における推進作用を無視した結果、文学發展中の現実主義と反現実主義との闘争を必然的に抹殺した。すなわち文学史を自然進化の歴史としてしまい、こうした闘争を否認することにより、文学の發展を単一の現象と見なしたものである。文学は上層建築であり、それは經濟基礎の支配を受ける。過去の作家は階級出身の不同と生活遭遇の不同により、現実に対する彼らの態度を決定し、作品においても、現実主義・反現実主義の闘争を形成するものである。詩經の国風が雅・頌から發生したとするのは、事実と反している。その間の不同対立は現実・反現実の対立と闘争を示し、現実主義文学は反現実主義文学からは生れ得ないのである。劉氏の錯誤は、文学發展の階級内容を無視し、通俗的進化論を運用した結果である。

(二)については、該書中の資産階級思想の別の一つの表現は客觀主義的傾向である。その叙述において只その必然性を説くのみで、結局それが如何なる矛盾と闘争の下に產生されたかを説明しない。現象的性質のみを説明して、当時の階級闘争中の作用を語らない。これは表面的には客觀主義で、實質上は資産階級の人性論的觀點である。と言うのも彼は文学の階級内容を無視したからである。階級分析の觀點から出發せず、そのため分析に當って混乱と抽象を來たし、時には只概念より概念に到達し、具体的な分析ができなかったものである。

(三)については、劉氏が文学發展中の 現実主義・反現実主義の闘争を否認することにより、分析に當って必然的に形式主義の道を歩むこととなり、文学の發展を単に一つの形式から他の形式に轉變することに帰結したのである。例えば漢の賦は詩經や楚辭から發展したものの、その區別は詩と散文、抒情と叙事の成分の増減にあるのみとした。漢の賦はその反現実的な内容より見れば、それは絶対に国風より發展して來ることのできぬものであるのに、劉氏はこの二つを混同した。形式主義の必然の結果として、形式主義の尺度を用いて作品をはかる標準とした。それはまた必然に作品の芸術標準を第一とするものにした。そもそも文学評価の標準に二つある（と多数の発言者が言った）。それは政治標準と芸術標準であって、

如何なる階級も政治標準を首位とし、無産階級のそれであれば資産階級のそれである。劉氏は作品の思想内容を軽視し、芸術を第一の批評方法とした。それは実質上、作品に対して階級分析の進行を回避するよう企図したものであり、それは資産階級形式主義批評方法の具体的表現である。……

劉氏は席上で発言し、先ず同志たちに対して感謝のことばを述べ、同志たちの意見の或るものには自分の要害を撃中され、或るものには莫大な啓発を受けた、と言った。彼は資産階級学術思想の、自己に対する危害を分析したのち、マルクス・レーニン主義と毛沢東の著作を通して学習し、徹底的に自己批判する旨表明し、参会者の熱烈な拍手と歓迎を受けた。

4. 「陶淵明評価の諸問題」について

先ず最初に陶淵明の政治的態度について。陶は政治上、当時の統治階級と合作しなかった。私はこれを彼の基本的政治態度だと思う。およそ歴史上の暴政統治の時代に当って、一個の作家がその実践において統治階級と合作しないということには、積極的な意味のあることである。陶は晋末の政治的暗黒時代に生れあわせ、統治階級と合作しないで、正義性を表明した。その作品はそうした内容を反映し、また彼の芸術実践の積極的意義をも決定した。

合作しないということは、不同の歴史時期において不同の意味を持つものである。陶の時代で、合作しないことは、実質上一種の反抗であった。彼は五斗米のために腰を折らぬと宣言し、詩中の表現は「金剛怒目」であり、これは当時からすれば決して軽々に挙げ易いことではなかった。

彼の具体的な政治態度から分析すれば、憤慨を托した「述酒」の詩たると、空想を托した「桃花源詩」たるとを問わず、彼はすべて現実に不満で、しかも這い上れないことを怨んでいるわけではない。しかしこの種の不合作は一種の反抗であるにしても、それは消極的な反抗である。

同志の多くは何れも陶淵明の退隱問題に論及した。中国の古代においては、士大夫たちが或は官途につき或は退隱するのは、もともと普通のことである。或る者は仕官した後に退隱し、或る者は退隱しながら仕官を求めるのであって、魯迅先生も、「隱士と官僚とが最も接近しているものであることは、一点の疑いをいれない」と言っている。してみれば退隱ということは、一般的に言えば、仕官ということと似たりよったりのものである。但しその間にも二種の状況があり、時として退隱は求官であって、それは合作を要求する一種の途徑であ

り、所謂「終南の捷徑」(正規の段階をふまずに官職につくための方法)である。しかしそれは時としては確実に一種の不合作の方法である。私は陶は後者に属すると思う。のみならず陶が官を求めなかったことも決して何ら清高とも言うべきではないのである。要するに「苟全性命」(かりそめに性命を全うする)ものであり、詩中、所謂「庶無異患干」(庶^{こいねが}わくは異患干なからん)とは、すなわちこの意であり、彼が終南の捷徑を歩むものであるとすることに私は同意しない。もとより退隱という方法をば高く評価することも亦まちがいである。それは一面において不合作であり、他面また現実闘争の逃避であることを認めるべきである。一個の現象は二種の意義を具有し、ただ一面を見ては不完全であり、絶対化するのほ錯誤である。

第二に、陶淵明の労働態度について。陶が労働を熱愛したと言え、これは勿論誤りである。しかし陶が労働を称賛し労働に参加したことを否認することも亦事実に符合しない。私は陶淵明というこの詩人が比較的高い成果をもち、並びに独特の芸術風格を具有している所以を、労働と分けて考えることのできないものと思う。彼は晋宋時代に生き、一転すれば労働の階級的輕視という偏見を取除くことができるのであって、生活実践と創作実践の中に在って労働を肯定すること、これは能くしがたく貴ぶべきものである。陶は地主階級出身で、儒学の教養を相当深く受けた人ではあるが、しかし生活の変遷により、労働に対する見方を変え、孔子と同じくない観点を提出した。これは当時からすれば、第二人者のいないものであることを肯定せざるを得ない。玄言の詩、游仙の詩、山水の詩が盛行していた時代に、彼は「山中饒霜露、風氣亦先寒」(山中には霜露饒^{しげ}く、風氣も亦先に寒し)など、或る程度、労働生活を感じた詩をものし、人をして耳目を一新せざる能わざらしめた。

陶は労働において農民の思想感情を具有していたとは言い得ない。彼の思想感情は農民のそれとはなお大きな距離があった。しかし階級的な生活的な局限により、彼は真正に農民の思想感情を具有する詩を作り得なかったというような言い方は、実質上、陶が終始封建階級の知識分子であったことを忽緒にしたものであるのみならず、彼の思想感情の変化を甚だ軽く見積ったものである。

他方、我らは、陶が根本からろくに労働しなかったと言ったり、彼の「勸農」の詩が反動であると言ったり、彼が些かの労働に参加したのは僅かに精神のよりどころとしたのに過ぎないと言ったり、彼が描写した労働も真実でないと言ったりすることはできない。要するに我ら今日の農民の労働態度をもって陶に要求することは無理である。こうした見方は前者と

恰好の対照をなすが、しかし錯誤の根源は一つであり、いずれも陶を一定の歴史時代において考察しないものであり、従って適当な歴史評価を得られないのが当然である。

第三に、陶淵明の人民に対する態度について。陶は人民に対して或る程度の同情を持っていた。しかし人民のために命乞いするというような作品は多くない。「晨興理荒穢，帶月荷鋤歸」「田家豈不苦，弗穫辭此難」などの詩句は多少は農民の生活状況を反映している。「相見無雜言，但道桑麻長」（相い見て雑言するなく，ただ桑麻の長びたるを道う）もまた多少は農民との感情上のつながりを反映している。また彼が一人の奴隷をわが子に与えたとき、手紙を書いて、「此亦人子也，可善遇之」（此れも亦人の子なり，善く之を遇すべし）と言った。これも多少は陶が些か人道主義的態度を具有していたことを示すものである。要するにこの詩人は人民に対して同情を有していたが、しかしその同情は決して強烈なものではなかった。彼の作品の全部について見れば、個人的頹廢の情緒は甚だ多いが、人民に代って言うところは甚だ少い。その点、歴史上の大作家杜甫・白居易の如きと比較すれば、とるに足りないものである。しかし陶が対処した具体的な時代に即して言えば、彼はやはり他の作家たちに比し高明を求めた人であった。

第四に、陶淵明の作品は現実を反映しているか否かについて。私は陶の作品は或る程度現実を反映していると思う。少なからず個人生活の真実を有し、また歴史的眞実性を有している。「述酒」の詩はもとより時事を描写し、階級矛盾を暴露し、その他「贈羊長史」「讀山海經」の如き農村生活を反映している詩歌が、社会の現実に対して、いずれも比較的眞実な反映を持っている。しかしこの種の反映は有限的である。全部の作品について見れば、地主階級の悠閑生活を描写したものが頗る多く、農民の痛苦生活を写したものが頗る少い。階級の局限性はこの方面においても顕著である。古代作家が現実主義的であるか否かを判断するには、単に階級闘争を反映する作品の比重からのみ見ることはできない。もし単にこの一点より見れば、それでは杜甫や白居易もまた基本上は非現実作家であると言える。何故なら、彼らの社会生活を写し階級闘争を反映した作品は、全部の作品の中でやはり少数を占めているからである。

さらに陶の現実を反映している作品は、時代の原因により、逃晦曲折の形式を採っている。「述酒」の詩がその最も好い例であり、その他、古を借りて今を諷する作品はすべて現実の曲折的反映である。歴史上かつて詩人が自由に物言うことのできなかつた時代があり、陶が生きたのは正にこの種の時代であった。魯迅先生はかつて当時幾多の文人がその死を得

なかったことを列挙したが、陶は幸にそれを免れた者である。してみれば、彼の創作上のこの種の状況は解釈のできるものである。

ここで「桃花源記」と「桃花源詩」とに言及しないわけにはゆかない。その中に写されたのは、詩人が現実には不満なところから幻想し来った世界である。当然当時の条件下では、陶のこうした幻想はなお「新世界に対する豫見と幻想性の描繪」を含有することはあり得ず、老荘の小国寡民の復古思想によっている。しかし老荘の思想自体もともと消極的な現実逃避の一面があり、また積極的な現実批判の一面もある。陶はこの種の幻想において既に批判の意を有し、かつまた逃避の心を有した。さればこのような作品には既に積極的な作用があり、また消極的な作用もあるのである。

彼の作品をば、空想的社会主義的理想を具有するものと言うのは確實でない。というのは当時はまだこうした理想を生み出す社会条件が備わっていなかったからである。之に反し、この作品を僅かに復古退嬰的なものであり、現実生活を粉飾するものとして引下げるのも確實でない。古代に在って復古的思想を提唱するのが、すべて退嬰とは限らないからである。時には、復古は只形式であり、内容は却って往々進歩的なものもある。「桃花源詩」には正にこの種の状況がある。

「春蠶收長絲，秋熟靡王税」（春の蠶に長き絲を収め，秋の熟^{みのり}に王の税なし）この思想は勤労人民の生活要求を反映している。太平生活を幻想するのも亦労働人民が乱世に在って生み得る生活願望であり、陶が作品中において表現したこれらの要求願望は、当時の労働人民と一致するところがあるのである。

もとよりこれによって陶は農民的思想感情を具有していたとすることはできない。何となれば、この種の思想は僅々一個の封建階級的作家が労働生活に接近し、かつ現実に対する不満の状況下より生れたものであるに過ぎないからである。その思想の基礎は、やはり搾取と圧迫を受ける経済地位ではない。またこの種の思想は農民と毫も共通するところがないと言うこともできない。歴史上の「乱離の人は太平の犬に如かず」という発想法は、労働人民の間においても存在するものである。我らは、解放された農民の覚悟をもって古代の農民を水平に衡量することができず、もしこのようにすれば、農民の思想情緒を反映する作家を捜しあてることは、とてもできるものではない。

第五に、陶詩の芸術性の評価について。陶は形式主義の文学が盛行した時代に生存しながら、独りよく風格素朴な作品を作り出すことができた。このことは何としても肯定しな

くてはなるまい。創作上のこの素朴性は彼の生活実践と不可分のものである。詩人は、人民生活と接触したことによって、その思想感情に素朴な一面を持っている。その故にこそはじめて言語素朴な作品をものすことができたのである。我らは、この種の風格は思想生活と完全にくいちがうと言うことはできず、またこの種の創作的素朴性は老莊思想の素朴性に力を得たものであると言うこともできない。事実上、陶詩の中には決して素朴でない作品もあり、「命子」と「贈長沙公」の如きは却って彼が受けた思想の局限と関係がある。

第六に、陶淵明の作品の影響に関する問題について。歴史上の考察に従えば、陶は、不同の時代において、不同的人に対し、不同の影響を与えている。鮑照・王維・孟浩然・李白・杜甫・白居易・柳宗元・蘇軾・辛弃疾より黄遵憲に至るまで、すべて陶の影響を受けたのである。この影響には、積極的方面と消極的方面とがある。封建社会に在って彼は統治階級に満足しない人々のために不合作という模範を樹立し、同時に現実を逃避する人々のため、彼はまた退隱という口実を与え、更に悪いことに、退隱して官を求める人々に「雅士」の偽装を与えた。陶淵明の思想影響は、ただ政治暗黒時代において合作を肯んじない一部の人々には積極作用をなしたとは言え、絶対多数には消極作用を起こした。もし杜甫・白居易・辛弃疾などの偉大な作家たちに対する影響（思想方面）について言うならば、それは往々にして消極方面に在り、このことは注意に値する。

陶の思想影響は以上のように複雑であり、今日に在っては却って比較的明瞭である。今日は社会主義新文化の建設時代であり、陶が不満とした現実はずでに消滅しており、その不合作から隱居の思想感情まで、それにはもはや如何なる積極作用も有り得ない。事実の証明するところ、今日に在っては只右派分子と思想消極の資産階級知識分子とがあってはじめて陶淵明の消極情緒を鑑賞し得るのである。要するに彼の思想影響は消極的である。最後に、私は魯迅先生が言う所——我々は一箇の作家を見るに、その「全人」を見なくてはならぬ——という意見がなお傾聴に値すると思う。

以上五篇の所論のみでなく、その他の所論においても、そこに一貫しているのは、最近中共で行われている古典文学再評価の基準が「現実主義」に在ると言うことである。現実主義とは「現実の反映」であり、正確には、当時の人民の生活の現実を作品の上に具体的に描写し反映する謂なのである。陶淵明を現実主義詩人と見るか、反現実主義詩人と見るか、その見解に相違はあっても、古典作品の価値をすべて無産階級唯物論の立場から見直そうと言う

のであり、作品の政治性を最大最高の基準とするものである。

かえりみるに、革命当初の狂瀾怒濤時代はさておき、1954年秋、古典文学の研究に関する論争として紅樓夢事件が起こった。大衆に愛読される小説「紅樓夢」は当時の封建階級の醜い内幕を暴露したものであり、かかる現実に対するレジスタンスであるとする党の見解から、紅樓夢学者俞平伯氏の所論を、作品と現実社会との関連を無視した資産階級唯心論であるとして、俞氏を批判したのであった。ついで翌1955年春に至って、現代文学の社会主義リアリズムに関する論争として胡風事件が起こり、紅樓夢事件とともに政治問題にまで発展した。胡氏が批判されたのは、その文芸思想がマルクス主義の外衣をまといながら、実は反マルクス主義唯心論者であったとするもので、これに対し胡氏は痛烈に反論し、階級観点をもって、人民性と階級制約の非常に複雑な内容を包含する偉大なリアリズム作家を判定するのは頗る危険であるとした。従って古典作家のリアリズムを研究するには、その歴史環境や人民に対する関係・態度、その主観世界と客観世界の相生相剋の関係などを厳密に分析してはじめて理解し得るとしたのである。後日、胡氏は更に反論して、過去の作家を一概に歴史の悲惨な奴隷と見ることはできない、このような見方は歴史の真相を歪曲する、今日より見れば幼稚な不合理なものさえあるであろうが、しかし一定の歴史条件と結合した彼らの英雄的面貌には、我らを培養する滋養がある、とも言っている。

紅樓夢事件・胡風事件は古典に対する一般の関心を高める契機となった。事実1956年頃より、特に百家争鳴・百花齊放(1957年)以後、古典文学に対する研究と批判がとみに盛んになってきた。しかし「厚古薄今」への批判もまた厳しく、「厚今薄古」が唱えられている現状である。丁度こうした時に、陶淵明に対して批判が集中されたのである。従来、陶淵明は詩人としての評価において殆んど完全無欠と見なされ、近くは清末憂国の志士譚嗣同や、現在中共で絶対の尊敬を受けている魯迅などの革命情熱をすらかき立てたと言われている。郭預衡氏も、古代に在って復古的思想を提唱するのは、すべて退嬰とは限らない、時には復古は只形式であり、内容は却って往々進歩的なものもある、と言っている。郭氏の論考には、時流に逆らわないでおこうとする努力がにじみ出ている、今のところ甚だ穩健な方の見解と思われる。郭氏の言うように、我らは、解放された農民の覚悟をもって古代農民を水平に衡量することができず、もしこのようにすれば、農民の思想情緒を反映する作家を捜しあてることは、とてもできるものではない。また胡風の言うように、一定の歴史条件と結びつけずに、いきなり今日的な意識と公式をもって律しては、厳密には、満足な古典作家は一人もな

くなるであろう。しかしそれでは、中共の文化政策たる民族の伝統を重んずることも成立し得なくなるわけである。

郭氏は陶淵明の「桃花源詩」において、復古的に見えて実は進歩的なものを見出しているが、私は最近橋川時雄博士の桃源物語に関する詳細な論考（草稿）を一読する機会を得た。橋川博士によれば、桃花源記を個の陶淵明に結びつけ得る根拠はどこにもなく、民間伝承が幾多の手を経て陶淵明に仮托されたものとしておられる。果してこれが事実であるとすれば、郭氏の論も空論であり、それを反駁して現実逃避の復古思想であるとするのも空論に過ぎない。中共は民主主義的社會主義的成分をもつ民間文芸をこそ優れた文化遺産だとしているが、それでは桃源物語こそ正にそうした文化遺産でなくてはなるまいと思われる。文学史的な系譜の展開に関する研究が未開拓であるのに、初めから簡単に割り切って評価しようとするのは、学問としてまともではないと思われる。

さらに現在の中共の青年たちの一部には、陶詩にあこがれて、現実からの逃避を想う傾向も見えるらしい（論文2.）。しかしそうした危険は、民族の伝統を断ち切ってしまう危険にくらべると、比較にならぬほど小さいのではあるまいか。古典文学の問題であるだけに、劉大杰氏も至極あっさり自己批判することを約束して満場の拍手を浴びたそうであるが、現在の中共がこの世の天国でないかぎり、もしも中共人民がその生活現実の苦しみに堪えかねて、これを描写し反映し批判した作品をものしたとするなら、中共は一体これをどうしようというのであろうか。もっとも「鳴放」に懲りてそれを敢てする作家もないであろうし、そうしたものが出版の運びに至る気遣いもないではあろうが――。

追記 本稿執筆以後、「文学遺産」第247期（2月15日）にまた陶淵明特輯があり、「全面的歴史的に陶淵明を評価すべきである」（内蒙古工学院汪浙成）および「陶淵明の討論に関して」（文学遺産編集部）の二篇が掲載された。後者によれば、一月末までに編集部に寄せられた来稿は百余篇、そのうち比較的普遍性のあるものは既に発表したか、更に来稿を全般的に整理し帰納した結果を報道するとしている。よってここにその要点を摘んで追記することとする。

〔一〕 陶淵明とその作品の総評価。来稿の殆んど全部がこれに言及しておる。多数は陶淵明を現実主義詩人とし、相当数はこれを非現実主義詩人とし、ごく少数はこれを傑出した現実主義詩人とし、また浪漫主義詩人とする者もある。

〔二〕 陶淵明の辞官帰隠。これについては凡そ五種の意見がある。

1. その意義を肯定し、積極的意義があるとするもの。
2. その意義を否定し、現実逃避の表現とするもの。
3. 一定の反抗性があるとし、ただ統治階級の内部より分化し来ったものに過ぎないとするもの。即ち農村はただ彼の避難所であり、従って作品において直接に現実の本質を暴露することができなかった。また実質上、階級闘争は人類社会を推進する動力であるとするマルクス・レーニン主義の原理を否定するものであるとする。
4. 彼の目的は逍遙自在などという個人的志趣を追求するに在るとするもの。
5. 道家の出世思想によって解釈するもの。

〔三〕 陶詩の現実反映の問題。これについては、一部の人々は、基本上肯定的態度をとり、人民に精神力を与えたとする。また他の一部の人々はこれを否定し、彼の反映したのは個人的貧困と個人的思想苦悶のみとする。また或る人々は、彼の中に物外に超然たる信念を見、彼が士大夫文人の眼光を以て農村の現実を見たとする。

〔四〕 桃花源詩。多数の人がこれに言及しており、専らこれのみを論じているものもあった。凡そ二種の意見があり、それを肯定するものと否定するものとである。前者は、詩中で美化したのは一個の理想社会であって、現実社会ではないとする。後者はその社会の基礎を落後社会の小農経済であるとし、毒素ある作品とする。

〔五〕 陶詩の芸術成就。これについて深刻に掘り下げたものは少ない。或る人々は、基本上肯定的態度をとり、詩壇に新風を注入したとし、中国文学史上、最も成功した「白描」詩人とする。

〔六〕 後世に対する影響。凡そ二種の意見があり、多数の人々はその積極的影響を認め、彼の農耕生活と労働に対する態度とは、後世の文人に好影響を与えたとし、少数の人々は、その消極的影響を認める。その他、影響の好悪はその具体的状況如何を見るべきで、一概に論じられないとしているものもある。

かくて編集部は、陶淵明問題に対して更に全面的な深刻具体的な分析がなされるべきことを強調している。